

106年の歴史に思いを馳せて

阪急池田駅

阪急宝塚本線の開業から106年。今年、「池田駅」は高架化から30年を迎える。どれほどの人を送り、迎えてきただろうか。池田の玄関口〆の今昔を取材した。



利便性・自然環境を両立 沿線開発のモデル地域

通勤通学はもちろんのこと、池田市周辺の観光地への玄関口としても親しまれている「池田駅」。平日の、1日平均乗降人員（2014年 阪急電鉄調べ）は5万1728人、と阪急電鉄各駅の中で13位。宝塚本線各駅の中では「梅田駅」、「十三駅」、「豊中駅」に次ぐ数である。

「池田駅」開業は、池田市の市制施行の昭和14年（1939年）よりも随分前の100年以上前に遡る。明治43年（1910年）3月10日に「宝塚駅」と

「梅田駅」を結ぶ「箕面有馬電気軌道（現在の阪急宝塚本線）」が開通し、同時に「池田駅」も開業。

当初、この沿線には大きい都市がある訳でもなく、のどかな田園地帯が広がっていたため「ミミズ電車」と揶揄する声もあった。しかし、「阪急電鉄株式会社」（以下、阪急電鉄）の創業者・小林一三氏は沿線開発を積極的に推進。ここ池田の地に、私鉄初となる分譲住宅地「池田室町住宅」をつくりあげた。都市部への利便性の良さとして自然の豊かさを兼ね備えた、郊外住宅「池田室町住宅地」は当時の都市生活者の心をつかみ、「池田駅」は

もちろんのこと阪急宝塚本線の乗客獲得に成功。沿線開発のモデル地域となった。現在も、「池田室町住宅地」界隈は、住民の働きかけのもと景観が維持され、当時の趣を垣間見ることができている。

小林氏も池田が気に入り、居を構えた。現在、その邸宅は「小林一三記念館」として残され、多くの観光客が訪れている。阪急電鉄の登記簿上の本店所在地も池田に置かれ、開業当初は運転課や社員教習所なども池田にあり、昭和46年（1971年）に平井車庫（宝塚市）が使用される前までは槻木町に池田車庫も存在していたという。

計画の決定から8年 待望の駅高架化完成

戦後、周辺の都市化が進むと共に乗客が急増、都市人口も増え、踏切による交通渋滞などの解消が急務となる。そんな中、池田市は昭和52年（1977年）に池田駅付近の連続立体交差事業を決定。2年後の昭和54年（1979年）に着工した。この事業は、池田市

内の交通の安全と円滑化を図ると共に、線路で分断されていた市街地を結び構想が含まれていた。また、新たに生み出される高架下の有効利用や側道の整備を促し、機能性の高いまちづくりを目指すものであった。着工から6年の歳月を経た昭和60年（1985年）、ついに「池田駅」の高架化が完了。交通渋滞も解消されたほか、踏切事故

等の危惧も軽減し、より住みやすいまちとして生まれ変わったのだ。

同時に高架下を利用した商業施設『阪急池田プランマルシェ』がオープン。昭和61年（1986年）には駅前広場、高架下店舗の工事が完了。続いて駅前南地区再開発も進み、『サンシティ池田』や遊歩道を流れる水路「せせらぎモール」が誕生。緑、小広場なども配置した近代的な駅前が完成した。この「池田駅」周辺整備は、昭和63年（1988年）に「美しく個性と風格のあるまちの景観づくり」が評価され「大阪まちなみ賞（都市景観建築賞）知事賞」に輝く。以来今日まで、高架下の商業施設と呼応し、市民が集う場として親しまれ、賑わいをみせている。

池田市の活性化に一役！ 進化する「池田駅」

駅の高架化から30年、池田市の中心として栄える駅周辺も、最近では「小林一三記念館」、「インスタントラーメン発明記念館」、「五月山動物園」など、池田市内の観光スポットを目当てにした利用者も多く見られるようになった。改札前には池田市の観光地図やパンフレット等を配置。また、池田市からの要請を受け、「池田サラリーマンO.B.会」の有志によって「改札前観光案内所」も8年前に発足。池田を訪れる観光客の道先案



1 上下線の高架化に続き、昭和60年（1985年）に新駅舎が完成 2 イベント等も盛んに開催されるコミュニティースペース「池田駅前てらてる広場」 3 広場には太陽光市民共同発電所でもある「ふくまるの家」が設置されている



昭和53年（1978年）の池田駅大阪側地下改札口（南）



1 明治42年（1909年）、池田付近の軌道敷設工事。中央の森が室町「呉服神社」 2 昭和53年（1978年）の池田駅西側、現在の駅前広場付近 3 昭和57年（1982年）池田駅高架化工事中

内人としてなくてはならない存在だ。また、さらなる観光客誘致、地域活性化を図るべく、3月中旬には観光地情報QRコード付きの「多国籍表示ツール付き案内看板（仮）」が設置予定だ。多くの名所を残す「自然と文化の調和するまち「池田市」」の玄関口として、「池田駅」は装いを新たに春を迎える。